

しん  
秦・紀元前 219 年

(教科書 68・69 ページ)

## 概要・特徴



中国・秦の始皇帝<sup>しこうてい</sup>は、天下を統一した後、視察のために各地を巡り、6ヶ所に7石の記念碑を建てて自らの権威を天下に示した。「泰山刻石」はそのうちの一つで、山東省<sup>さんとう</sup>にある泰山<sup>たいざん</sup>の山頂近くに建てられたもの。始皇帝が定めた公式書体である小篆<sup>しょうてん</sup>（各地で独自に展開していた文字を、大幅に整理・簡略化して統一したもの）で刻された。前半は、始皇帝の治世の秩序正しさや正当性をたたえている。後半は、始皇帝の死後、その功績を正しく後世に伝えるための方策について臣下が交わしたやり取りが追記されている。元は220字程度が刻されていたとされるが、倒壊・火災などをへて、現在はわずかな残石に10字が残るのみである。残石は、泰山の麓にある岱廟<sup>たいびょう</sup>（泰山を祀る建物）に保存されている。

縦長の字形や均一な太さの線、厳密な左右相称の構えなど、小篆の典型を見ることができる。洗練された書法によっており、新たに制定された公式書体の権威を強調しているかのようである。

## 作者について

宰相・李斯<sup>りし</sup>（生年不詳～紀元前208年）の書と伝えられている。李斯は、楚の上蔡<sup>そ じょうさい か</sup>（河南省）の出身で、字は通古<sup>あづな つうこ</sup>。秦の始皇帝の即位後、信任を得て丞相<sup>じょうしょう</sup>（現在の首相）となった。文字の統一をはじめ、始皇帝の行った統一事業の主なものは、李斯の建議によるものであったという。

## 時代背景

秦の始皇帝は、戦国時代の覇権争いに最終的に勝利し、紀元前221年に中国を統一した。天下統一後の事業として中央集権制を敷き、文字、貨幣、度量衡<sup>どりょうこう</sup>（長さ・容積・重さ）などの統一を行うことで、支配の徹底を狙った。小篆は、そのときに定められた公式書体である。日常の記録には、篆書を簡略化し、実用的にした隸書<sup>しんれい</sup>（秦隸）が用いられた。